

異常気象で終わる様に努力することが大切

10月になり、ぐっと季節が進んだような気がしますね。子どもたちの服装も、先週あたりからずいぶん長袖が増えてきました。校庭の雑草より、楡木の落ち葉の方が気になるようになってきました。



しかし、というか、やはり、というか、今年の夏はずいぶんと気候的に記録づくめだったようです。熊本市は、9月末までに猛暑日（最高気温35度以上）が51日、熱帯夜（最低気温25度以上）に至っては60日を超えるなど、統計開始以降の記録を更新しているとのこと。連日、異常気象だったとの報告が、新聞などのメディア各所で報道されています。

あれ？そういえば、去年もそんな報道がたくさんあったような気がする。

猛暑日の連続日数が記録的とか、最高気温が更新されたとか。そして、きまって次のような言葉でまとめられていました。

「本年度は、異常気象でした」

あれ？毎年が異常気象？？

じつはこれ、登校中のひろこさん（6年生仮名）の口から出た言葉です。確かに「異常」という言葉と、「毎年」という言葉は相性が悪いでしょ。だって、「毎年」ではないから「異常」なんだと、私もそのひろこさんの言葉を聞いて、はたと気づかされました。毎年のように繰り返される異常がいつも通りになり、異常な状況に気づきにくい状況が生まれている。

これはいかん、ですね。

このような状況を踏まえ、先日、国連のアントニオ・グテーレス事務総長は、「地球は沸騰化の時代に入った」と、少々過激な言葉で事態を表現しています。そして、このような気象変動は、人類存続にかかわる重大な出来事である、と多くの識者が述べています。その影響が実際に「異常」な状況を毎年、何度も繰り返している事実。私たちが経験したことのないような未曾有の気象災害が起こっている現実。

多分、これらの変化の始まりはごくわずかだったはず。しかし、それが積み重なって、気づいたときには大きな変化。毎日が「異常」気象ということになっているのだと思います。

ここで、大切なことは、たった二つのことだと思います。一つ目が、この小さな変化に気づくことができる洞察力をもつこと。そう、ひろこさんのように何らかの変化に気づく肌感覚をもつことだと思います。一人一人違うので、その気づき方は多様だと思います。体感で、言葉の使われ方で、テレビ番組の内容で…いろんな場面で気づく。

そして、気づいたことを、なかったものにはしないこと。これが二つ目の肝要な点。人は、どうやら思考を省略することを特技としているようです。そりゃそうだ。毎日毎回熟考ばかりしては、動けない。だから、気づいたことを自分の都合がよいように調整し、なかったものにしがちです。

なかったものにしない方法は、とても難しいし、一人ではできないといっても過言ではない。だから、私たちはみんなで学ぶわけです。他者（友達）の違和感に気づかされ、自身の葛藤を表現しながら、お家の方も一緒になってみんなで学ぶ楡木小を目指したいものです。